

## 遊庭秘抄の研究

### はじめに

『遊庭秘抄』は蹴鞠道の一家御子左家の鞠書であり、十四世紀中頃の成立とされる。蹴鞠道家としての御子左家は比較的早く十五世紀には絶家してしまったが、この書は群書類従に収められ、しかも解説が施設・用具・装束・作法・技法等蹴鞠全般に及んでいるので、蹴鞠の基本的知識を得るのに適した文献とされてきた。しかし、蹴鞠書『遊庭秘抄』自体の研究が進められてきたとは言い難い。

西岡虎之助は、群書類従所収本について、蹴鞠書としては詳しい本で、筆者は藤原爲明(一二九五～一三六四)であるとしている。<sup>1)</sup> 岩橋小弥太は、群書類従所収本の作者を巻頭の選者名から御子左為定(一二八五～一三六〇)として疑うべきではな

かろうと言い、内容については、鞠を蹴る技よりも作法に重点を置いており、とくに鎌倉中期以降の前例を多く挙げているのが特徴であると述べている。<sup>2)</sup>

井上宗雄は、作者について、同書の記事に貞治二(一二六二)年の禁裏御鞠会等、為定没(延文五：一三六〇年)後の記事があるのに着目し、為定の従弟で彼の右筆を永く勤めた為重(一三二五～八五)が為定の口伝を聞き、補筆したものであろうと推測している。<sup>3)</sup> 桑山浩然も、作者について、やはり為定没後の記事に留意して、彼の著であるとしても後世の補筆を考えておくべきであろうと言い、また、為定が没したときは従弟の為明とは義絶状態であり、嗣子為遠(一三四三～八二)は「平生大飲過法之人」であったとの理由で、この両者を補筆者に比定することに危惧の念を示している。<sup>4)</sup>

渡 邊 融<sup>\*1)</sup>

\*1) 放送大学教授(生活と福祉)

表1 遊庭秘抄諸本名称・略号表

伝本名	所在・所蔵	架蔵番号等	略号	備 考
平野(イ)本	天津市平野神社	3-3*	《平3》	旧難波家本、古写
平野(ロ)本	天津市平野神社	3-4*	《平4》	同上、難波宗城校合
平野(ハ)本	天津市平野神社	3-5*	《平5》	同上、石井行康写
陽明3本	陽明文庫	73-3	《陽3》	非家熙筆
陽明4本	陽明文庫	73-4	《陽4》	近衛家熙自筆
天理6本	天理大学附属天理図書館	783-イ27-6	《天6》	旧鳥居大路家蔵
天理7本	天理大学附属天理図書館	783-イ27-7	《天7》	
天理14本	天理大学附属天理図書館	783-イ29-14	《天14》	旧鳥居大路家蔵
国会本	国会図書館	ひ-2-6	《国会》	明暦禁裏本
岩瀬本	岩瀬文庫	115-23-09	《岩瀬》	旧柳原家本
阪本竜門本	阪本竜門文庫	二二一	《竜門》	旧平瀬家本
尊経閣本	尊経閣文庫	一六-五八	《尊経》	旧鳥丸文庫本
内閣文庫本	内閣文庫	坊199-250	《内閣》	旧坊城家本
京大勸修寺本	京都大学文学部	勸修寺家寄託本-1222	《京大》	勸修寺家本
京都女子大本	京都女子大学	YW 780-8-F	《京女》	旧池尻家本
群書類従本			《類従》	群書類従所収

注 \*印はマイクロフィルムの整理番号、なお、平野(イ)(ロ)(ハ)本は東京大学史料編纂所に写真版がある。写真帳冊次番号四四

一九八七年以来の蹴鞠研究の途上で、天理大学附属天理図書館の収集になる蹴鞠書群と天津市平野神社所蔵旧蹴鞠道家難波家の膨大な蹴鞠書類と、二つの大蹴鞠史料群に巡り逢った。これらのなかに従来あまり一般に知られていなかった遊庭秘抄の伝本六点が含まれていた。<sup>5)</sup> また、昨年度省科学研究費助成金の交付を受けて行った研究の際に、西尾市立図書館岩瀬文庫所蔵の一伝本を見ることができた。目録上では遊庭秘抄の書名でなく『蹴鞠雑襍』として一括されていたもので、これも一般にはあまり知られていなかったようである。

本稿は、『国書総目録』等によって従来から知られていた諸本と前記の諸本とを通観し、遊庭秘抄の伝本の系統と撰者、及びその成立等の問題を考えてみたものである。現在までに披見した諸伝本の所在、架蔵番号等は表1のとおりである。以下説明の便宜のため、各伝本を表示するのに表1略号欄所載の記号を用いる。<sup>6)</sup>

## 一 御子左家と蹴鞠

建暦三(一二二三)年五月十六日、当時五十二歳の藤原定家は、十五歳の息為家が鞠好きの後鳥羽・順徳両院の側近となって蹴鞠にのめり込み、家学の和歌に身を入れないのを嘆いて、「魔縁積悪の祟りなり、慟哭して余り有り、これを独り悲しむ」、

さらに、当時既に鞠聖とされていた大納言成通を「恨む」とま  
で書いている。<sup>41)</sup>

当時、後鳥羽院によって公家鞠が組織化され、様々な故実が  
成立しつづあった。承元二(一二〇八)年には院を鞠道の長者  
に推戴する鞠会が開かれた。これが後代の範型となる。<sup>42)</sup> 同五  
年、院は、鞠足の身分と技量によって着用すべき鞆の色柄と文  
様とを規定した程品を定めた。<sup>43)</sup> 定家の嘆きをよそに、建保二

(一二二四)年、十七歳の為家は臣下として第二階級の紫白地  
の鞆を許された。年齢相当では蹴鞠界の先達難波宗長・飛鳥井  
雅経兄弟より早い許しである。流石の定家もこの時には「これ  
規模(名譽)たる事と云々」と記している。<sup>44)</sup> これが御子左家  
が蹴鞠道家となる契機だったのである。

蹴鞠道家は難波・飛鳥井・御子左三家と一般に言われるが、  
鎌倉時代中期以降の京都では御子左家が蹴鞠界を制していた。

後年、一条兼良(一二四〇〜一二八二)は、この模様を「…その後  
は、後嵯峨院・後深草院・龜山院など此道の中興にてましまし  
ける。其頃、中院大納言為家卿と申侍し人。堪能につきて上鞠  
など承りけるとぞ。出家の後、龜山殿の御鞠に七十七にて召立  
てられ。父子ともに無文燠革(最上位の鞆。注渡辺)の鞆など許さ  
れ侍りて。世の例なきことに申伝へ侍り。…」(私に漢字を宛て、  
句読点を改めた)と伝えている。<sup>45)</sup>

鎌倉時代、難波・飛鳥井の両家は所謂関東祇候公家であって、

鎌倉住いが多かった。難波家は、北条時頼が宝治二(一二四八)  
年に宗教(一二〇〇〜七〇)の弟子となってから専ら幕府の師範  
格であった。飛鳥井家も鎌倉とは縁が深かった。開祖雅経の妻  
が大江山元の娘で、教雅(早世)と嗣子教定(一二二〇〜六六)  
を生み、その教定の妻は北条実時の娘で、『内外三時抄』の作  
者雅有(一二四〇〜一三〇一)を生んでいる。雅有も生涯六回  
も東海道を往復している。<sup>46)</sup>

公家鞠では、天皇や上皇が臨席して開かれる晴の鞠会で、上  
鞠、解鞠、天皇・上皇に具足(沓・鞆)を献じこれを着けさせ  
る役等を勤めることや、程品の高い鞆の着用を許されることが  
名譽とされた。後嵯峨院以後の都の蹴鞠界では、概してこれら  
の点で御子左家は他の二家を圧していた。岩橋氏が遊庭秘抄は  
「鎌倉中期以降の作法について詳しい」としているのは、以上  
のような蹴鞠界の事情によるのである。

またこの時代には、三家の間で故実に関する相論がしばしば  
あった。鎌倉では難波と飛鳥井が懸の方角や装束の付け方につ  
いて、都では難波と御子左が上鞠の作法を巡って、それぞれ争っ  
た記録が見える。<sup>47)</sup> しかし、飛鳥井と御子左との間は婚姻関係  
で結ばれ、良好であった。すなわち、飛鳥井教定女(雅有姉)  
が御子左為氏の妻となつて為世を生み、雅有女が為世の長男為  
通の妻となつて為親・為定を生んだ。雅有も為世もともに鞠の  
宗匠として資格年齢である四十歳に達した年に無文燠革の鞆を

許されているから、遊庭秘抄の撰者とされる為定は祖父二人がともに蹴鞠界の宗匠である。<sup>8)</sup> 斯界の御曹司というべきであろう。

## 二 遊庭秘抄の伝本の系統

### 1 諸本の構成

諸本の巻立て、簡条名とその配列、錯簡の有無等は表2の通りである。本文の脱落や錯簡も見られるが、基本的には全本が三十簡条立て、配列は異なるが簡条名はほぼ一致している。

巻の構成によって、これらを以下の(a)(b)(c)三群に大別できる。

融 邊 渡

(a) 十簡条ずつ上中下三巻に仕立てたものⅡ《類従》、《尊經》、《内閣》、《天7》、《京大》、《京女》の六本。

(b) 十五巻ずつ上下二巻に分けたものⅡ《国会》、《平3》、《天6》、《天14》、《陽3》、《陽4》、《岩瀬》、《竜門》の八本。

(c) 巻分けがないものⅡ《平4》、《平5》の二本。

(a) 群と(b) 群とは簡条の配列が異なる。表2は、最左列の《類従》の配列に従って簡条番号を付けてある。これを基準にすると、(b) 群では第十九条の「足踏」の次、すなわち第二十条目から、(a) 群で第二十五条以下に置かれている「副身鞠Ⅱみにそうまり」、「帰足Ⅱかえりあし」、「延足Ⅱの

びあし」、「負鞠Ⅱおいまり」の高度な個人技(キック)系の簡条が並び、次に「鞠長Ⅱまりたけ」、「縮開(捲開Ⅱつめひらき)」、「野臥Ⅱのぶし」、「乞(こ)事」、「請(うくる)事」と集団技系の簡条が続いている。

簡条配列においては(c) 群の二本に統一性がない。《平4》が(a) 型、《平5》が(b) 型にと別れる。この点については、次節の(3)で触れる。

### 2 諸本の内題・奥書等

#### (1) (a) 群

次に諸本の内題・奥書等を見てゆこう。(奥書等の引用文には便宜読点を施し、通用の文字を用いた。／は改行、「」は傍記、「」は割り書きを示す)

《類従》の奥書は次のとおりである。

「右遊庭秘抄一巻、雖有誤字脱文、以類本不多不能校合、俟他日善本出而已、」

内題は「遊庭秘抄」、その下に「入道大納言為定卿(御子左)」と撰者名が入っている。《尊經》には奥書がないが、内題とその下の撰者名は《類従》と同じである。

《天7》にも奥書がない。内題は「遊庭秘抄」、その下に小さく「凡為忠卿抄たるへし」とある。為忠は、為明の弟、応安六(一三七三)年六十四歳で没、従二位中納言。没年から逆算す

表2 『遊庭秘抄』諸伝本の箇条配列一覧

《類從》 《尊經》	《天7》	《内閣》	《京大》 《京女》	《平4》	《国会》 《平3》	《陽3》 《陽4》	《岩瀬》 《竜門》	《平5》	《天6》
						《天14》			
上巻	上	上	上		上	上	上		上
1 根源	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2 時節	2	2	2	2	2	2	2	2	2*
3 懸	3	3	3	3	3	3	3	3	3*
4 棹	4	4	4	4	4	4	4	4	4
5 庭付網	5	5	5	5	5	5	5	5	5
6 座敷付見證座	6	6	6	6	6	6	6	6	6
7 韃付結緒	7	7	7	7	7	7	7	7	7
8 沓	8	8	8	8	8	8	8	8	8
9 数	9	9	9	9	9	脱	9	9	9
10 上鞠	10	10	10	10	10	10	10	10	10
中巻	中	中	中						
11 解鞠	11	11	11	11	11	11	11	11	11
12 装束	12	12	12	12	12	12	12	12	12
13 烏帽子懸	13	13	13	13	13	13	13	13	13
14 扇付疊紙	14	14	14	14	14	14	14	14	14
15 付鞠於枝	15	15*	15	15	15	15	15	15	15
16 鞠勢分付縫様	16	18*	16	16	下16	下16	下16	16	下16
17 舐拜付手持	17	16*	17	17	17	17	17	17	17
18 進退作法	18	17*	18	18	18	18	18	18	18
19 足踏	19	19	19	19	19	19	19	19	19
20 措開付向措	20	20	20	20	25	25	25	25	25
下巻	下	下	下						
21 鞠長(足)	21	21	21	21	24	24	24	24	24
22 乞	22	22	22	22	27	27	27	27	27
23 請	23	23	23	23	28	28	28	28	28
24 野臥	24	24	24	24	26	26	26	26	26
25 副身鞠	25	25	25	25	20	20	20	20	20
26 帰足	26	26	26	26	21	21	21	21	21*
27 延足	27	27	27	27	22	22	22	22	23*
28 負鞠	28	28	28	28	23	23	23	23	22*
29 煎物破子以下食*	29*	29*	29*	29	29	29	29	29	29
30 禄*	30*	30*	30*	30	30	30	30	30	30

注 1 \*は錯簡あり。

注 2 上中下はそれぞれ各巻の巻頭を示す。

ると延慶三(一二二〇)年生まれとなる。<sup>41)</sup>

《内閣》の奥書は次のとおりである。

「右命備書禄了 俊将」

内題は「遊庭秘抄」、その下に「坊城藤氏藏書印」の印がある。坊城家の旧蔵書である。坊城俊将(一六九九〜一七四九)は極官が正二位大納言、江戸中期の人。《内閣》は江戸中期の写である。内題下の撰者名はなく、表紙外題の下に、やはり「為忠卿撰」とある。

《京大》は寄託勸修寺家文書の一である。『国書総目録』では書名が外題のとおり『遊庭抄』となっている。内題は「遊庭秘抄」、その下に「前大納言為定卿撰」とある。この本はすべて紙背に書かれており、奥書は次のとおりである。

「右一冊者、以前中納言康親卿自筆之本、／於下冷蓬亭、遂書寫訖矣、／

大永元年五月中旬之候写功畢／桑門剡溪(花押)」

但し、大永元(一二二二)年は八月二十三日改元である。中納言康親は中山康親、大永元年三十七歳。下冷蓬亭は冷泉政為(当時七十七歳、前権大納言、出家して法名暁覺)の居宅である。<sup>42)</sup>

《京女》には、前記大永元年五月付、桑門剡溪名の奥書に続いて次の奥書がある。

「遊庭秘抄(一冊)借請大理卿(経逸)／蔵書令書写了／

天明七年八月 勘解由次官藤 (花押)」

この本は江戸後期の写、底本は《京大》である。大理卿経逸は勸修寺家経逸、天明七(一七八七)年四十歳、左衛門督、検非違使別当。勘解由次官藤は二十六歳の池尻(藤原)暉房である。以上の(a)群の六本に共通して見られるのは、第二十九、三十条の錯簡である。すなわち、第三十条「禄事」の本文がその前条「煎物破子等食事」本文の後半に紛れ込んでいて、これを「禄事」の本文で「衣禄事、前の煎物破子等之中にこもれりと云々」と断っている。《京大》の奥書に従えば、この錯簡は大永以前に生じていたことになる。

## (2) (b)群

(b)群の《国会》の奥書は次の通りである。

「康安元年仲種中甸之比染筆畢、更／不可有外見者也、／

金紫光禄大夫 藤「為明卿」在判

《平3》《陽3》《陽4》《天14》の四本には、前記奥書中の「為明卿」がない。康安元(一二三六)年は延文六年で三月二十九日改元。金紫光禄大夫は正三位の唐名である。「公卿補任」によると、この年御子左家で正三位は権中納言為明とその弟非参議為忠である。

《国会》は上下二巻二冊本、各巻末に「明暦」の角印がある。後西天皇の典籍副本作成事業による写本であろう。

陽明文庫の二本の本文の内容は全く同じである。(財)陽明

文庫長名和修氏によると、《陽4》は名筆家近衛家（一六六七〜一七三六）の完成期の筆跡で、宝永から享保頃の書と思われる。《陽3》は家の筆跡に似ているが他筆であるという。

《陽4》は《陽3》にある本文の脱落部分の行間への補入を本文中に収めているから《陽3》を清書したものであろう。

この二本とも第九条「数事」の本文全部が脱落している。表2の通り、《天一14》にも同じ脱落がある。そのうえ、《天14》の行間への補入や、改行・丁替え（一丁二十四行立て）、振り仮名、小見出しの朱書等が《陽3》と殆ど一致する。《天14》は上賀茂神社の有力な社家鳥居大路家旧蔵本であり、同家は鞠聖成通の師賀茂成平以来、蹴鞠では名の聞こえた家である。

これらを勘案すると、近衛家が鳥居大路家蔵書《天14》を写して《陽3》を作り、これを更に家が清書して《陽4》が成立したという筋道が考えられる。従って、以後本稿においては、特記しない限り《陽3》を《陽4》に準ずる本として扱う。

《平3》には、本奥書以外に書写人、書写の時期等を示す記載はない。ただ外題「遊庭秘抄上下」の下に「古写」とある。字体から見て、江戸初期の写と思われる。

（b）群の《天6》には、上記の五本に共通する奥書のうち「金紫光禄大夫 藤在判」の部分だけがあり、その後に次の奥書がある。

「鎌倉借移之間秘事不可過之者也、仍無／左右不可及外見者

也」

「此一帖中山頭羽林御本寫之了、尤秘本／也、不可出闕外秘之、作者為兼忠卿云々、

文安六〔五〕年三月一日（花押）」

文安五年は一四四八年。中山頭羽林は親通、当時二十三歳、從三位左中將。この本には鳥居大路家蔵書印がある。天理図書館へ入った経路は異なるようであるが、《天6》も《天14》と同じ賀茂鳥居大路家旧蔵本である。後述するようにこの本は諸本中特異な存在である。

（b）群の他の二本、《岩瀬》《竜門》には、上記金紫光禄大夫名の奥書がない。

《岩瀬》の内題は、上巻が「遊庭秘抄」、下巻が「遊庭秘抄下」、上下とも内題の上に「柳原庫」印がある。旧柳原家蔵本である。上下巻の奥書はそれぞれ次のとおりである。

上巻 「文明十九年二月廿七日書了／禁裏御本拝借下了

〔下巻以他本已前書了了〕

「右以親長卿自筆、命家僕令書了、／件本於勸修寺中納言經逸手／

天明元十二下旬 正二位藤原（印 紀光）」

下巻 「本云、永享十年五月十六日／賢実 判」

「右本、或仁見之候間、片時之間馳筆／写留了、／

于時文明十七年二月十七日／按察使藤原（花押影）」

「右以親長卿自筆、命家僕令書寫了／件本在勸修寺中納言經逸手／

天明元十二下旬正二位藤原（印 紀光）同日遂一校了」

また、下巻の文明、天明両奥書の間に次のような一文が挿入されている。

「或抄云、成通卿見鞠精其数有四人（面有金形文字）／一人名 春帰花／一人名 夏安林／一人名 秋色商／一人名 冬庭残」。

融  
邊  
渡  
《岩瀬》は上巻が禁裏本、下巻は「或仁」の所蔵本と系譜は異なるが、何れも甘露寺親長自筆の勸修寺家本を天明元（一七八一）年に書写した本である。甘露寺親長（一四二四～一五〇〇）は蹴鞠に堪能であったが、鞠書の書写をも精力的に行っている。<sup>3)</sup> 柳原紀光（もとみつ 一七四六～一八〇〇）は、この年三十六歳、正二位権大納言。国史の編纂で聞こえた人である。《竜門》は、内題はそれぞれ「遊庭秘抄上」「遊庭秘抄下」、下巻奥書に

「本云、永享十年五月十六日 賢実判」

とあり、その後に、《岩瀬》と同じ「或抄云、成通卿見鞠精……」の一文がある。《岩瀬》と同系統の本であろう。川瀬一馬によると、《竜門》は平瀬家旧蔵本、室町末期の写とされている。<sup>4)</sup> 本文も、上下巻とも《岩瀬》に非常に近い。

### (3) (c) 群

(c) 群の二本はいずれも難波家の旧蔵書である。

《平5》は内外題とも「遊庭秘抄」、続いて巻頭に「條々三十箇條」の箇条目録が掲げられている。(a) 群の諸本には目録に上中下巻の区切りがあるが、(c) 群の両本にはこれがない。奥書は次のとおりである。

「此一冊可令助筆之由、難波三品之／所望難洩任写本馳亮毫、尤／僻字等有之間、以證本可被加／再校者也、／

元禄十式歳五月中旬 拾遺行康」

元禄十一年は一六九八年、拾遺（侍従）行康は当時二十六歳、石井（いわい）行豊の息、桓武平氏西洞院家の庶流である。難波三品は従三位左中将宗尚三十一歳、飛鳥井雅章三男から同家へ養子に入った人である。この本の箇条配列は(b)型であるが、行康が(a)群系の本をも校合したようで、本文中、第一条の前に「上巻イ」、第十条の後に「右三十箇条之内上巻十箇条イ」：の如く、三巻立ての区分と箇条配列をも当該箇所に示している。

《平4》の奥書は次のとおりである。

「右遊庭秘抄當家所傳有二本、古写／其文疎略、新写石井行豊卿筆雖文詞多有／脱字錯簡、飛鳥井家所傳之一本亦有異同、／以三本加校合更令新写者也、／

安永己亥春 前垂槐宗城」



安永己亥は同八年で一七七八年、宗城は正二位権大納言難波宗城(一七二四〜一八〇五)、慶長年間の同家再興後六代目の当主である。名足で、蹴鞠故実にも詳しく、また、多数の蹴鞠書の写本を残している。彼が校合した本は自家の『平3』『平5』(行康の名が父の行豊になっているのはおかしいが)と(a)群系の飛鳥井家所蔵本、との三本であろう。巻頭の目録三十箇条の配列は(b)型であるが、本文の配列は(a)型を採用し、三巻立ての区切りの当該箇所を「イ本説」として示している。内容においても、後に示すように両系統を折衷した形跡が認められる。つまり(c)群は(a)(b)両系の校合・折衷の産物である。

### 三 諸本の内容

#### 1 引用書

前章で見たように、構成からすると『遊庭秘抄』の伝本は二つの系統に大別し得る。諸本の内容にそれが現れるかどうか、或はどのように現れるかを見て行きたい。

公家鞠では故実、つまり善き前例、が重んじられる。『内外三時抄』の作者飛鳥井雅有が言うように、蹴鞠の道の者の心得は「願・行・證」の三字である。まず、上達したいという願いを持つことⅡ願、次に実際に練習することⅡ行、最後に練習の

範を先人に求めることⅡ證であった。<sup>11)</sup> 何に斯道の範をとるかは道の者にとって重大事だったのである。

(a)(b)両系統から、それぞれ『類従』と『国会』をとる、引用書(書名が明かな鞠書に限る)とその引用頻度を比較してみたのが表3である。

結論から言えば、この点では系統別の違いはないと言える。主な引用書を簡単に解説しておこう。<sup>12)</sup> 『卅箇条式』は現存しない。略して「式」とも呼ばれる。蹴鞠道で聖とされた藤原成通(生没年は表4を参照、以下同じ)が撰じた最古の鞠書とされ

表3 遊庭秘抄伝本別鞠書引用回数の比較

蹴鞠書名	伝本	《類従》	《国会》
卅ヶ條式		7	9
蹴鞠口傳集		7	7
要略抄		2	3
革匍記		1	1
成平が抄		1	1
源九が抄(記)		2	2
成通一卷の秘書		0	1

る。『遊庭秘抄』をも含めて、後世の蹴鞠書に対する影響が強い。恐らく三十箇条の簡略な文体で、技法中心の説明書だったであろう。彼の弟子難波頼輔の『蹴鞠口傳集』に多く引用されている。

その頼輔は難波・飛鳥井両蹴鞠道家の祖。『蹴鞠口傳集』は、白河院時代以後の名足たちの教えを類聚したもので、式を含めて、師成通説の引用が最も多い。白河院から後白河院に至る院政期の蹴鞠界の様相を知るのに有用であり、蹴鞠故実の宝庫と言える。<sup>3)</sup>

『成平抄』は成通の師で、関白忠実「鞠神妙」と言われた賀茂神主成平の作、『源九記』は藤原長実の小舎人童であった名足源九の鞠日記、『革弔記』は頼輔の孫、飛鳥井流の開祖雅経の作とされるが、三書とも伝存しない。成平、源九の言動は『蹴鞠口傳集』に、成通に次いで多く引用されている。<sup>4)</sup>『要略抄』は、題名から現存書の『革弔要略集』が想定されるが、『国会』への引用文の一つが現存の要略集に見当たらないので異書であるかもしれない。<sup>5)</sup>

表に見るように、『類従』と『国会』の主たる典拠は、ともに『卅箇条式』と『蹴鞠口傳集』である。これは、藤原成通から難波頼輔へ、という公家鞠の道統と一致する。御子左流が公家鞠という大きな流れの一端にあることの証左である。

## 2 登場人物について

次に登場人物に目を向けてみよう。表4は『類従』と『国会』への登場人物とその登場回数を示したものである。但し、一つの場面で同一人物の名が複数回使用されていても、ただ一回に数えた。また対象を院政期以後で、存在を確かめられる人物に限った。

表の上二群の人々は天皇・上皇、摂関・大臣等、所謂「貴人」と呼ばれる人々である。『蹴鞠口傳集』でもそうであったが、これらの人々は各家流が蹴鞠故実の権威付けをする時に、その事例として登場してくることが多い。

天皇・上皇の中では後鳥羽院の登場回数が最も多い、同院は御子左家に蹴鞠道家としての資格を授けたとされる人物であるから当然であろう。この他に鎌倉中期以後の暗の鞠会を主催し、或はこれに臨席した亀山、後伏見、後醍醐ら歴代の帝が何回か登場する。摂関・大臣の場合には、鎌倉・南北朝期の鞠会に列席した人々が一、二回ずつ登場する。摂関・大臣の登場回数は、『類従』の延べ十二人に対して『国会』の方は五人である。これは、『類従』に建武以後の鞠会の引用例がより多く見られるためである。

蹴鞠道成立に直接かわる人々及び他流の人々の中では、鞠書の引用と見合って成通が最も多く、成平、源九、雅経らがこれに次いでいる。『類従』に二回登場する難波宗緒は、他流の

表4 遊庭秘抄伝本別人物登場回数の比較

人物	伝本	《類從》	《国会》
後鳥羽 180/293		5	4
順徳 197/242		1	0
亀山 249/305		2	1
伏見 265/317		1	0
後伏見 288/336		2	3
後宇多 267/324		1	1
後醍醐 288/339		2	2
後光厳 338/374		1	0
(以上 天皇・上皇)			
近衛基平・深心院246/268		1	0
〃 基嗣・後岡本入道305/354		2	1
〃 道嗣・後深心院332/387		2	0
鷹司兼平・昭念院228/294		1	1
二条師忠・香園院254/341		1	0
〃 兼基・光明照院268/334		1	1
〃 良実・普光園院216/270		0	1
西園寺実氏・常盤井相国194/269		1	0
〃 実兼・後西園寺入道相国249/322		0	0
花山院家定・内府283/342		1	0
徳大寺公清・内府312/360		1	1 (公晴)
洞院公賢・入道太政大臣291/360		1	0
(以上 摂関・大臣)			
藤原長実075/133		3	1
源 盛長		1	1
賀茂成平081/136		2	2
藤原成通・拾遺納言097/162		6	7
源九		3	3
難波頼輔112/186		1	1
〃 宗長164~225		1	1
飛鳥井雅経170~221		2	3
難波宗緒288~336出家		2	0
(以上 蹴鞠道統の者)			
御子左為家197~275		1	1
〃 為世・祖父禅門250~338		9	10
〃 為定293~360		1*(撰者)	1
〃 為藤・故戸部275~324		1	0
(以上 御子左家)			
賀茂経久		0	1
〃 忠久		0	1
〃 定久		2	2
〃 基久		2	1
(以上 賀茂社家)			

人々のなかで唯一撰者の同時代人である。彼は正安四(一二三〇)年、十四歳で後伏見院の御師範を命ぜられたほどの名足だったから、御子左家にとって恐るべき敵であった。そのためである、登場場面のうちの一回では、宗緒の所業が「悪しき例」として攻撃的になっている。ここに相論の一端が垣間見られる。<sup>6)</sup>

御子左家の人々の中では圧倒的に為世が多い。為世は為家の孫であり、「開祖為家から五代目」である遊庭秘抄の撰者の祖父にあたる。彼の登場回数は御子左家のみならず、全登場人物中最高である。ただ一人、卅箇条式等の鞠書を加えた場合の鞠聖成通だけがこれを上回っている。この書に対する為世の影響力の強さを物語っている。

この点をもう少し詳しく見て行こう。為世の登場場面のうち、第一に多いのは、韃の許し・結緒の結び方、上鞠、扇の差し方、枝に鞠を付る方法等、後鳥羽院以降、晴の鞠会の盛行とともに頼に煩雑になった作法に係わる場面である。為世が当該故実の範例であったり、またそれを、撰者が祖父為世から教えられたという内容である。これが《類従》に六例、《国会》に七例見られる。その他は、為世が若いころ「潜り帰きくぐりがえり」という曲足を演じて龜山院に「骨無ししつるにや」と激賞された話、為世が見證の時には一座の鞠足が御子左流独特の負鞠という曲足を演ずるのを遠慮した話、ある鞠会で為世が明足をして名牛を下賜された話等、為世が如何に世に聞こえた名足だったかを示す挿話である。前記「骨無し」の例は、『一老革くわ物語』所載、文永十一（一二七四）年四月二十二日大柳御所鞠会記に「為世希代の名足」と見える時のことと思われる。<sup>9</sup>この時為世二十六歳。龜山院のこの一言で為世の蹴鞠界での権威が確立されたのであろう。正応二（一二八九）年、四十歳に達した年に斯道の宗匠を示す無文燠革の韃の着用を許されるのである。

要するに、遊庭秘抄は御子左流の公家鞠故実を説くのに、鎌倉後期の公家鞠界の巨峰であった為世の権威と名声に依拠している。これは両本共通である。

為定は撰者の一人とされている人である。《類従》では、彼の名が内題下に「為定卿撰」と掲げられ、本文中では「愚老、

愚身」等の謙称が用いられる。これは為定を指すと考えるのが自然であろう。これに対して《国会》には内題下の選者名がなく、「上鞠」の条に「御子左大納言入道為定卿…」と他者の立場で登場する。ここが、《類従》と《国会》の決定的な相違である。この点を次節で検討してみたい。

### 3 為定と愚老・愚身・愚意の登場場面

前節で述べたように、《類従》と《国会》の決定的な相違は撰者である。前者では為定がこれに擬せられるのに対して、後者では、康安元年の金紫光祿大夫、為定の従弟為明・為忠兄弟の名が浮かび上がってくる。

そこで、両本から「為定」及び「愚身、愚老、愚意」が用いられている箇所を抽出し、どちらかの本のこれに対応すべき箇所該当文言がない場合、その相当箇所を抽出し、これを比較対照して表5に示した。

表5-1のとおり、「為定」の出現箇所は、双方一カ所ずつである。両本の「上鞠」の箇条本文中、《類従》からは為定の姓名官職の部分がすっぱり抜けている。《類従》のこの部分の大意は、「祖父為世の教えを受けて無作法の上鞠をした人の振舞を、撰者が定が見及んだ」となる。《国会》の方は、「為定卿が、祖父為世に教えられた方法に従って無作法の上鞠をした。（撰者はそれを見た、或は聞いた。）」となる。

表 5 為定と愚身・愚老・愚意の出現場面の比較

類従本

表 5 - 1

為定

《尊經》《京大》	〈内題〉遊庭秘抄 入道大納言為定卿
《尊經》	〈上鞠〉故徳大寺前内大臣〔公清〕家鞠の日。祖父 禪門〔為世〕の庭訓にて。この作法ふるまひ侍しと 見及侍りし也。

表 5 - 2 愚身・愚老・愚意

全	イ〈根源事〉當流は中院大納言為家卿従奉受後鳥羽 上皇勅説。至愚身既五代。慙依為累代之家業。…
《尊經》《内閣》《天 7》《京大》 《平 4》《平 5》	ロ〈庭付網事〉上五尺に土をふるひてをく。いかな らん霜雨にも。晴間待え侍れば。水とく引て最上也。 故陽明博陸亭の庭。愚老〔為定〕往年のむかし奉行 して瓦を敷侍し也。…
《尊經》《内閣》《天 7》《京大》 《平 4》《平 5》	ハ〈韃〉抑奥義の色は無文燠草也。以之長者色とい ふ。當道譜代の人。或御年たけさせ給ふ仙洞。又は 上足の攝録臣。さりぬべき大臣ならでは不可着用之。 當時の世には近衛前博陸〔道嗣公〕愚身〔為定〕両仁外。 此色着用したる人なし。
《尊經》《内閣》《天 7》《京大》 《平 4》《平 5》《天 6》	ニ〈進退作法事〉同集云。鞠にあふこと淀河のごと しとなむ。うへのどかにして下にはやさ心をもつべ し。尤此本文愚意に相叶へり。…
《尊經》《内閣》《天 7》《京大》 《平 4》《平 5》	ホ〈負鞠事〉二度も三度もつゞけて肩をまはすはい とやすし。かかるえせ足どもは。愚身蹴出して後。 盛季やうのくせまり好物ども悦喜して。見習て蹴侍 れど。初心の人ゆめゆめ蹴べからず

## 国会本

表 5 - 1 為定

〈内題〉遊庭秘抄上 (記名ナシ)	《平 3》《天14》《陽 4》《岩瀬》 《天 6》《内閣》《天 7》 《平 4》《平 5》
〈上鞠〉建武之比、徳大寺前内府 {公晴公、于時中納言}第にて鞠会侍しに、御子左入道前大納言為定卿 {于時中納言}、亜相禪門のをしへにて此作法を振舞侍りき、	《平 3》《天14》《陽 3》《岩瀬》 《内閣》《天 7》《京大》 《平 4》《平 5》 * 《天 6》場面なし

表 5 - 2 愚身・愚老・愚意

イ〈根源事〉當流は中院大納言為家卿、忝奉受後鳥羽上皇勅説、至愚身既五代、慙依為累代之家業、…	全
ロ〈庭付綱事〉後岡本入道関白家にて庭を結構せらるゝと拝見せし、それも一丈はかり堀て底に瓦をそこはくしきて、其上に土をふるひてをかるゝと身及侍し、木は奉行し侍しかと庭は家僕とも沙汰し侍し也、	《平 3》《天14》《陽 3》《岩瀬》  * 《天 6》奉行人に言及せず
ハ〈職〉奥義の色は無文燠革也、号長者色、以之先途の色とす、當道の人々嫡流一人被免之、其外御所様御堪能なる時めさるゝ也、…中略…、さては摂関家の人々器用によりて勅免あり、	《平 3》《天14》《陽 3》《岩瀬》  * 《天 6》嫡流一人の語なし
ニ〈進退作法事〉同云、よと河のことくに心をもつへしと云り、うへはのとかにて、下はやき心をもつ也、同云、…	《平 3》《天14》《陽 3》《岩瀬》
ホ〈負鞠〉二三度も蹴之は大事のわさなりとみえ侍る也、是等の足は初心にては、思ひもよらぬ事なるへし、	《平 3》《天14》《陽 3》《岩瀬》  * 《天 6》下足の思ひいたらぬ足なるべし

次ぎに表5-2、「愚老・愚身・愚意」の使用例に目を転じよう。イの「根源事」では両本同文である。撰者に擬せられる三人がともに為家五代の後裔、為世の孫であるから、この表現は不都合ではない。しかし、ロ以下ホまでの四例では、『類従』に見られる「愚身・愚老・愚意」の文言が、『国会』の方の相当箇所には見当たらない。のみならず、「根源事」以外の箇条では、『国会』中に「愚身・愚老・愚意」またはこれに類する文言が見られない。その四箇所を順次見て行こう。

《類従》のロ、「庭作り」の部分の大意は次のようになる。

昔、故陽明博陸（近衛基嗣Ⅱ文和三Ⅲ一三五四年没）第の鞠場を作った時、奉行を愚老が務めたが、水捌けをよくするために、やはり底に瓦を敷いた。

同ハ、無文燠革の鞆を長者の色と言う。最上位の程品である。これは蹴鞠道家の人、年齢が長じた上皇、蹴鞠が上手な摂関の人、技・年齢の点で相応の資格がある大臣、これらの人以外には着用を許されない。現在では近衛前関白道嗣公と愚身だけが許されている。

同ニ、鞠に合わせるのは淀川のようにせよという教えがある。つまり、表面（川面）は悠々としているようで、内心（川底）は油断せず素早い心を保てという。この教えは愚意にぴったりである。

同ホ、二度三度、鞠を肩の辺で転がして廻すのはたやすい。

盛季のように曲足好きの連中は、愚身がこの技を蹴出してから大喜びで使っている。しかし、初心者はこのようないかがわしい技を絶対にしてはならない。

《国会》の方では、ロは次のようになっている。後岡本入道関白家（基嗣）の鞠場を作るのを拝見したが、ここでも、一丈ばかり掘って底に瓦を敷きその上にふるった土を載せたのを見た。懸を植えるのは撰者自身が奉行したが、庭の方は家僕が受け持った。

同ハ、無文燠革の鞆は長者の色と言い、最上位の程品である。蹴鞠道家の人々では、その家の嫡流一人には着用が許される。

その他には、ご堪能な天皇・上皇もこれを着用なさる。…中略…また摂関家の人々のうちで上手な者には天皇のお許しが出る。

同ニでは、教えの内容は『類従』と同じであるが、「愚意に叶へり」の一節がない。

同ホでは、負鞠という高度な技が初心者向きでないとしていることでは『類従』と同じであるが、「見えはべるなり」と客観的な表現になっている。撰者自身はこれを演じないということであろうか。

両本を併せて考えてみよう。ロの場合、もしこの鞠場作りが同一の工事であったとすると、片方は庭作りを奉行したと言い、もう一方は懸の木を植える作業の奉行は撰者がしたが、庭作りは家僕がしたという。言い分が食い違っているだけでなく、

《国会》の発言は、庭作りは「家僕の仕事」と前者を揶揄するような言い方である。どちらが真実を伝えているのかは分からないけれども、これが為定（前者）と為明兄弟（後者）であるとすれば、『愚管記』がいう「義絶状態であった」ことを窺わせるのに十分である。<sup>8)</sup>

口の無文燠革の鞆の許しについて、為定がこれを許されていたことを示す客観的な史料を今のところ見ていない。しかし彼は御子左家の嫡流と認められており、蔵人頭であった二十歳代後半の頃、既に花園院の「鞆堪能」との評を得ているから、<sup>9)</sup>

融 邊 渡

公平に見て、資格年齢（四十歳）に達した元弘から建武頃には許されていた可能性はある。道嗣の場合、彼が貞治二年禁裏御鞆会で無文燠革の鞆を着用していたことは確かであるが、これがどこまで溯れるかは定かでない。為忠も貞治御鞆会で燠革の鞆を着けている。同鞆記に「無文」の字は見えないが、道家の雲客は有文燠革を着用しなかったようであるから、無文であろう。<sup>10)</sup> しかし、彼も康安二年の段階でどうであったかはわからない。為明については不明である。付け加えると、道嗣の関白職在任（康安元―一三六一年十一月―貞治二―一三六三年六月）は為定の没後であるから、近衛前博隆（道嗣）という言い方は、「上鞆」の条に見られる貞治禁裏御鞆会の記事とともに後世の補筆であろう。

以上のように、ニ、ホは、撰者を考える手掛かりにはなりに

くいが、ロ、ハは、元徳から貞和頃の鞆会における彼らの動向が明らかになれば、有力な判断材料になる。

他の諸本のこれらの部分に関する記述如何をそれぞれ表5に掲げた。《類従》と一致するものは《類従》の側に、《国会》と一致するものは《国会》側に伝本の略号を記入した。どちらにも属さない第三の記述もあった。これは\*を付して特記しておいた。

表5-1の「上鞆」で、奇妙なことに（a）系統の《尊経》を除く四本、《内閣》《天7》《京大》《京女》のこの部分に「御子左入道大納言為定卿」の文言が入っている。《内閣》《天7》の場合には、むしろこの文言があるために内題下の「為定」の選者名がなく、「凡そ為忠卿抄なるべし」と入れたり（《天7》）、外題下に「為忠卿撰」（《内閣》）と入れたのではないかとさえ思える。《京大》と《京女》の場合には、内題下の撰者名にも「為定卿」と入っているから一貫性が失われてしまっている。つまり、為定を撰者として首尾矛盾がないのは《類従》と《尊経》の二本だけになってしまっている。

表5-2の方は、概ね（a）群は《類従》、（b）群は《国会》へと別れている。（c）群の二本は「愚老、愚身」を用いた記述になっている。全体の傾向は、構成で見られた（a）（b）両系統の別と概ね重なり合うと言えるであろう。また、《天6》が特異な伝本であることが分かる。なお、《京女》と



《竜門》は全項目について検討する余裕がなかったので、作表の対象としなかった。

#### 4 蹴鞠故実、技術から見た諸本

これまで、構成、引用書、登場人物、撰者などについて諸本の異同を見て来た。次に蹴鞠の故実や技法において、《類従》と《国会》の間に顕著に見られる違いを見よう。

##### (1) 故実

故実に関して《類従》には基本的な点で二三の「落ち」が認められる。

その第一は「懸事」の条にある。正式の鞠場には懸の木を四本植える。乾―松、良―桜、巽―柳、坤―楓が飛鳥井、御子左両流の正規の懸であった。鎌倉期の難波流では桜と柳が入れ替る。これが相論の一因となった。<sup>11)</sup> それはさておき、《類従》の「懸事」の条には「柳は巽、桜は良、楓は坤」とあり、「松は乾」がない。この条の冒頭に「本儀は柳桜松鶏冠木此四本也」とあるから、これは明らかに落ちである。《国会》にはこの欠落がない。

その第二は「躰拜付手持事」の条にある。《類従》の同条には「口傳集にも鷹をすへて鞠を蹴るといへり」という一節がある。『蹴鞠口傳集上』の序に「居鷹打鞭之躰、其諺猶残云々」とある一節の引用であろう。これは、鞠を蹴る時の袖(手)の

持ち方について、鞠書でしばしば用いられる比喩である。したがって、ここは「鷹をすへて鞭を打つ」となるべきである。

《国会》はこれを正しく掲げている。<sup>12)</sup>

第三、「乞事」の条には『古今著聞集』の有名な鞠精伝説、鞠聖成通の技が神業である所以を解き明かす説話が掲げられている。著聞集では成通の前に出現する鞠精は三人で、その名前が列挙されている。<sup>13)</sup> 《類従》のこの部分の記述は次のとおりである。「各の顔どもご覧ぜよとて髪をかきあぐ、ひとりの額には春陽花といふ金の字あり、又一人の顔には夏安林といふ字あり、重ねて児の云、我らは…」とあって、三人目の「秋園」という鞠精の名が落ちている。《国会》にはやはり落ちがない。

これらの故実は公家鞠にとっては基本的なことであるから、道家の者が撰じた原本の段階から落ちていたとは考えられない。やはり、成立後のある時期に荒本となったものを筆写する際に生じたことで、既述の第二十九、三十条の錯簡とともに、比較的早期(大永元年まで)に起こったことであろう。あえて言えば、二―一で見た《類従》と《国会》の個人技の箇条と団体技の箇条配列の違いは、《類従》の方に原因があるかもしれない。

##### (2) 技法

次に技法から、注目すべき両本の記述の違いを一つ上げておこう。それは「捲開事」(以下縮開と表記する)の条にある。縮開とは一座八人の鞠足が鞠を追って動く際のフォーメーション

ンを言う。蹴る人と蹴る地点とによって、幾つかの型があった。この条では、その一つである「對縮Ⅱむかいづめ」を説明している。

對縮とは、ある懸の内側正面近くに上がった鞆を、対角の懸に位置した鞆足が追って行って蹴る場合を言う。《国会》では、これを次のように説明している。「…重ね詰め②四、五尺寄りて詰むべし、巽の懸に鞆の懸る時、乾の兩人の中に、むねとある一人①詰めて蹴之、…（中略）…巽の木にて對縮蹴る時は、木の本に立つ人⑤、⑥は深く立入り、そば（稜）（南の西、東の北）なる人④、⑦は寄りて、西の南（坤の角）に立つ人③、南の西まで一丈ばかりも詰め、廻りて詰め寄るべし、北の東に立つ人⑧これに同じ…」。図示すると25頁の図1のようになる。《類従》では「乾の懸に鞆の懸る時、木の本へ兩人①②深く立入待れば、巽に立たる器用の人⑤詰め寄せ待べし。其時に重ねて今一人⑥、間五尺ばかり置いて詰め寄るべし、この時分西の方のそばの人③（⑧）、一丈ばかりも詰め寄せべし、又艮の懸に立たる人⑦、東より北へ木の通り廻り行く、坤の懸の南に立たる人④西へ廻るべし、…」とある。これを図2に示す。（傍線筆者、本文と図1、2の①～⑧は鞆足を示す） 両本を比較すると、プレーが行われる懸が正反対の角にあることが分かる。つまり図形が丁度対称になっている。縮開図は鞆場図とは違い、方角が示されないのが通例であるから、説明文抜きの縮開図に

表6 遊庭秘抄諸本内容比較

	松	鷹をす へて 鞆	秋	縮
	乾	○	園	開
《平3》	○	○	○	巽
《平4》	○	○	○	巽
《平5》	○	○	○	乾
《陽4》	○	○	○	艮
《天6》	×	×	×	乾
《天7》	○	○	○	巽
《天14》	○	○	○	巽
《国会》	○	○	○	乾
《天会》	○	○	○	乾
《岩瀬》	×	×	×	乾
《尊經》	×	×	×	乾
《内閣》	×	×	×	乾
《京大》	○	×	×	乾
《類従》	×	×	×	乾

- 注1) 松は乾：○はその一節あり、×はなし。  
 2) 鷹をすへて：○は「鞆を打つ」、×は「鞆を蹴る」。  
 3) 秋園：○はこの語あり、×はなし。  
 4) 縮開：鞆が懸る木の方角を示す。

新たに説明を付けようとする場合には起こり得ることである。<sup>94</sup> 両本の違いは、對縮図だけが先にあり、後で両本の撰者が別個に説明を付けたことを推測させる。ほかにも多少の相違が認められるが、紙幅の都合でここでは取り上げない。

以上の四点に関する諸本の記述如何を、表6に示した。ここで、とくに注目されるのは、「縮開」で《天6》一本だけが、鞆が懸る木を艮としていることである。この本は、前にも指摘

したように、特異な伝本である。ここでも(a)群と(b)群とは概ね分かれる。(c)群の二本は故実に関しては欠落や誤まりを修正しており、(b)群寄りである。《平4》の難波宗城が縮開で《国会》系の記述を採っているのが面白い。

#### 四 遊庭秘抄の撰者たち

##### 1 「愚身」について

為定は従来から遊庭秘抄の撰者として人口に膾炙された人物である。しかし三で見たとように、為定撰として首尾矛盾がない伝本は僅か二本であり、むしろ少数例に属する。そこで、他の史料によってもう少し「愚身」を検討してみたい。<sup>1)</sup>

難波家旧蔵本中に『二条家蹴鞠抄』という二十五丁程の本がある。奥書によると御子左家鞠道書で底本は花山院家蔵書である。寛保二(一七四二)年末に難波宗建が借り、当時十九歳の嗣子宗城に筆写させた。宗城は「大旨は遊庭抄であるが、脱落した箇条が多く文言も違う、…中略…遊庭抄と考合すべきである、…」と奥に記している。確かに底本が荒本だったようで、懸から延足まで十五条ほどが見えるが、首尾が欠け、脱落・虫食いもかなりある。しかし遊庭秘抄と同文の箇所は少なくない。その中で最も注目されるのが「韃付結緒事」条である。少し長くなるが、主要部を紹介しよう。「…(韃の)左足を結ぶ事老

者の所行也、祖父禪門(為世<sup>1)</sup>筆者注)常に此儀を振舞へり(結様別紙有之)、…(主上々皇親王が)御出座之時、譜代の人(雲客)御沓韃を持参して、切縁に御坐之程に御足を奉結之、愚身常に此所役に参侍き、主上々皇も長者之色とて無文燠革の御韃をば宗匠に被仰合被召之、道重く思食さるる故に、先途の長者色をは叙慮ばかりにても召さず、忝なく後伏見院御法牀以後、建武に御鞠の侍しに、故大納言入道(為世<sup>2)</sup>筆者注)仰合られて件長者の色も召され侍き、…中略…、當道の人は飛鳥井も難波も正□「統敷」一人は着之、賀茂輩とて近来好士あり、經久社務亜相禪門の門下にて此道を稽古し出して、今の定久社務以下面々名譽堪能の者ども有、是も是等も燠革までは思ひよらず、…(中略)…、陣内に御鞠の公宴なき故に、愚身今まで燠革の韃勅裁を給ながら不着用無念の至極也、…(下線筆者)。為世を祖父と呼んで、作者が為定、為明世代であることを示している。内容は遊庭秘抄と重なり、文言も一致するくだりが多い。この「愚身」は《類從》の撰者と同一人と見てよいであろう。

この中で、従来の諸本にない記述が二点(傍線部)ある。すなわち、愚身が常に具足役を勤めたこと、愚身は無文燠革の韃着用者ではあるが、着用の機会に恵まれなかったことである。ここに登場する「今の賀茂の社務定久」とは、『太平記』巻一五に登場する神主定久である。<sup>2)</sup>つまり、作者が言う「今」は

建武以後のことである。

とすれば、当時御子左家の後継者として認知されていた為定がやはり「愚身」の第一候補者であると考えられる。<sup>63)</sup> 彼は後醍醐天皇の治世初期の藏人頭であり、また「鞠堪能」の評価を得ている。御子左家では具足役、無文燵革鞆の最適格者である。同年代で二歳下の為明も考えられるが、後述するように彼の蹴鞠歴が不明であるのと、何よりも愚身を極力削除している金紫光禄大夫の有力候補者であるので、彼が「愚身」とは考えにくい。

## 2 金紫光禄大夫

《国会》の奥書が示す『遊庭秘抄』の成立年（康安元＝一三六一年）は、御子左家にとって大変微妙な時機である。つまり、為定の没年（延文五＝一三六〇年）と貞治二（一三六三）年禁裏鞠会、為明の没年（同三年）の間である。<sup>64)</sup> 井上宗雄氏によると、延文五年三月為定没の前後には、為忠が十年近い南朝への出仕を切り上げて帰京している、これは、為定没後、その嗣子為遠やその後盾の為重と二条家歌学の宗匠の地位を争っていた兄為明が呼び戻したのではないかとされる。<sup>65)</sup> このような目で見ると、確かに金紫光禄大夫が「愚老」に対して挑戦的であり、「愚身・愚老・愚意」を極力削った伝本が存在する理由が見えてくる。つまり、蹴鞠界でも御子左家の内紛が露わになって来

ていることを示すものである。

金紫光禄大夫が為明、為忠のどちらであるか判然としない。或は両者合作の可能性もあろう。《国会》は奥書の「在判」の上に「為明卿」とある。禁裏の底本にあったのであろう。金紫光禄大夫の奥書がない《岩瀬》には、外題の下に「：然而上鞠之条ニ非為定卿事分明、愚勘御子左中納言為明卿抄也」とある。柳原紀光の考証であらう。

一方、《陽4》の巻末には、近衛家が公卿補任に拠って、為忠卿作「無疑者也」としている。これより半世紀程前、寛文四（一六六四）年に冷泉為清（一六三二～一六八）は、御子左一門として蹴鞠を家業にしたい旨を幕府に願ひ出た。その口上書に「二條家為忠作の遊庭抄なども為家之流儀と候、：」とある。<sup>66)</sup> この願ひは退けられたが、この時冷泉家では遊庭抄を為忠作としている。同家に為忠撰の『遊庭抄』が伝存していたのかもしれない。

『冷泉家系図』（内閣文庫蔵）では、為明・為忠ともに「歌鞠宗匠」とされているが、<sup>67)</sup> 今のところ、為明は当時の鞠会の人数にその名が見えず、貞治禁裏鞠会にも見證としてすら名が見えない。高齡（六十九歳）のためか、或は鞠会の直前、二月末に命ぜられた新拾遺集撰集で多忙だったためであらうか。<sup>68)</sup> 既述のとおり、為忠はこの鞠会で無文燵革の鞆を着用している。この会での無文燵革鞆着用者は、関白近衛道嗣三十二歳、中納

言蘭基隆五十歳、侍従三位為忠卿五十四歳の三人である。蔵人頭で鞠会奉行の御子左為遠二十一歳は、解鞠役と主上の具足役を勤め、韃は錦革、飛鳥井雅家・難波宗仲・宗音の三人も錦革、為忠は鞠道家中の最上席である。道嗣は上鞠役を勤めた。<sup>9)</sup> 撰関・大臣でも當道譜代でもない蘭基隆は為遠の妻の父、よほど名足だったのであろう。

この三人が顔を揃えた鞠会の記録が、これより二十年前にもある。康永二(一三四三)年(月日不明)仙洞御鞠会の初立八人の中にこの三人の名が見える。道嗣は中納言中将、歳十三と記され、為忠は三十四歳、基隆は右中将で三十一歳、この他には花山院長定、飛鳥井雅宗(この年八月没)の名が見える。<sup>10)</sup> このように、為忠はかなりの蹴鞠歴を持っていたから、彼が鞠の宗匠として『遊庭抄』を撰じた可能性は十分に考えられる。

### 3 二条家の蹴鞠書

遊庭秘抄の諸本に共通しているのは三十箇条の箇条名と冒頭の「根源事」である。金紫光禄大夫撰の遊庭秘抄が「愚身」を「根源事」以外では排除し、「庭作り事」では、明らかに「愚身」撰の遊庭秘抄を意識し、しかもこれに対して批判的な記述をしている。《類従》には、貞治禁裏鞠会の記事や関白道嗣の称号に見られるように、後世の補筆が入っている。補筆者は井上説のように為重であろうか、或は為遠も『冷泉家系図』では歌鞠

宗匠であり、晩年は兎も角、貞治の鞠会の際には奉行・解鞠・具足という大役を勤めているから、その記録くらいは書き留めていたのではないだろうか。また、この系統の本は比較的早期に荒本となった形跡があり、かなり原型が損なわれていると思われる。これらを勘案すると、金紫光禄大夫撰の本以前に原遊庭秘抄とも言うべき本があったと考えざるを得ない。その本の撰者が為世を受け継いだ為定だったのではないだろうか。<sup>11)</sup>

《国会》は、「愚身」撰の本を元にし、これに手を入れる形で作られたのであろうが、更にこれらの共通の下敷きとして、祖父為世の教訓と為家以来御子左家に蓄積されて来た家説・記録の類とがあったと思われる。たとえば、弘長以後の鞠会を記録した『二老革芻話』などはその類いではないだろうか。

以上のように、『遊庭秘抄』は御子左一門の分裂、併存に伴って、何種類かの本が作られたと考えられる。康永二年の仙洞鞠会の記事を収める『二条流鞠道秘記』には、康永鞠会の記事のすぐ後、全巻の三分の二ほどの所に「応永十九年四月七日、以御子左為将(又は為持<sup>12)</sup>筆者注)御本ウツシヲハム」なる一文があり、また巻末には「御子左為尹相傳畢」という奥書がある。為将(ためゆき)は、為忠の孫として『満濟准后日記』の永享六(一四三四)年正月十八日の条に登場する人物である。また、為尹(一二三六―一四一七)は冷泉為秀の孫、応永十五(一四〇九)年二月に、御子左家正統の後継者を示す民部卿に任ぜら

れた人物である。この本は、末尾約三分の一の部分に『国会』と殆ど同文の帰足之事、延足之事、副身鞠之事、乞事の四箇条を掲げている。

以上のように、四一であげた『二条家蹴鞠抄』や、この『一条流鞠道秘記』のような遊庭秘抄類似の書、或はその一部を収めた鞠書が、当時の御子左系各家に伝存していたことが窺われる。『天6』もこういった本のひとつと考えれば理解しやすい。

融

### おわりに

邊

以上をまとめてみると次のとおりである。

渡

1 『遊庭秘抄』の伝本の流れは、撰者自身が「愚身・愚老」等として本文第二条以下に登場する本と金紫光禄大夫が撰者である本との二群に概ね分けられる。

2 前者の原撰者である「愚身」は御子左為定であると思われるが、この本には後世の補筆がかなり加わり、また、成立後約百五十年年くらいの間に荒本になり、原型が崩れていると思われる。三十箇条の箇条名と第一条「根源事」は原型どおりであろう。

3 金紫光禄大夫撰の本は、第一条には「愚身」が登場するが、第二条以下には登場しない。撰者は御子左為明、その弟為忠

のどちらか、或は合作かもしれない。この本は「愚身」撰の本を下敷きにして作られたと思われる。

4 江戸時代の難波家で、上記両系統の本を校合・折衷した本が作られている。

5 二群が生じた原因は、御子左家の内紛にあると思われる。元徳・建武頃の晴の御会における鞠足の役割・装束等が明らかになれば、愚身が誰であるか、より確かなるであろう。

以上

本研究は平成7年度文部省科学研究費補助金、一般研究(c)課題番号〇七六八〇一三四の交付を受けて行った研究成果の一部である。

### 文献と注

はじめに

- (1) 西岡虎之助『新校群書類従解題集』昭和五八年、名著普及会研究開発部編、五三六ページ。
- (2) 岩橋小弥太「遊庭秘抄」『群書解題』第十五、続群書類従完成会、昭和三七年、四〇、四一ページ。
- (3) 井上宗雄『中世歌壇史の研究—南北朝期—』明治書院、昭和四〇年、五六三、五六四ページ。
- (4) 桑山浩然「蹴鞠書の研究」、渡辺・桑山共著『蹴鞠の研究』所収、東大出版会、平成六年、一五〇、一五一ページ。
- (5) 蹴鞠史料・蹴鞠書については、桑山浩然「蹴鞠書の研究」、前

(6) 掲注(四)と同じ、一二五～一五八ページを参照されたい。  
 なお『国書総目録』所載の勸修寺家本『遊庭秘抄』は、京都大学の寄託勸修寺家本『遊庭秘抄』(文明十七年写一冊)であるが、所定の場所になく、披見できなかった。

一 藤原定家『明月記』建保元年五月十六日。

(2) (1) 「承元御鞠記」『群書類従』第十九輯訂正三版第六刷、続群書類従完成会、昭和六二年、三六九～三七五ページ。

(3) 『革・要略集裏書』轍事条、渡辺・桑山共著前掲『蹴鞠の研究』二一九～二二〇ページ。

(4) 藤原定家『明月記』建保二年二月八日。

(5) 一條兼良「享徳二年晴之御鞠記」『群書類従』第十九輯訂正三版第六刷、前掲三八七ページ。

(6) 飛鳥井家及び飛鳥井雅有については、水川喜夫「飛鳥井雅有日記全釈」風間書房、昭和六〇年、「小引」五～九ページ、「解説」一～七二ページ、及び巻末の「年立」によった。

(7) 蹴鞠道三家間の確執については、拙著「公家鞠の成立」『蹴鞠の研究』渡辺・桑山共著所収、七六～八七ページを参照されたい。雅有については、水川喜夫著前掲書一八九～二九一ページ、為世については『伏見天皇宸記』増補史料大成所収、正応二年三月九日、臨川書店、昭和六〇年、二八九ページ。

(2) (1) 以下、官職・年齢等は新訂増補国史大系『公卿補任』による。下冷蓬亭については、『大日本史料第九篇之十四』雑載、学芸欄、三五八ページ。

(3) 甘露寺親長と蹴鞠については、稲垣弘明「応仁・文明期における蹴鞠会の様態―甘露寺親長の日記を通して―」、筑波大学『日本史学集録』十三号一九九一年所収、及び拙著「鞠と舞」

(4) 『比較舞踊研究』第二号一九九五年三月、比較舞踊学会編、一七～二七ページ。  
 川瀬一馬「遊庭秘抄」、『竜門文庫善本書目』竜門文庫刊、昭和二十七年、八二ページ。

### 三

(1) 『内外三時抄』練習編「誓願」の条、前掲『蹴鞠の研究』四三～四三三ページ。

(2) 以下、個々の蹴鞠書については、桑山「蹴鞠書の研究」前掲渡辺・桑山共著『蹴鞠の研究』所収、を参照されたい。

(3) 『蹴鞠口傳集』は、桑山浩然編『蹴鞠技術の研究』一九九一年、平成三年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書一般研究(C)課題番号〇三三八〇一〇五、一一〇～一二八ページに翻刻(上は渡辺融、下は渡辺正男・渡辺融による)が収められている。

(4) 渡辺融「公家鞠の成立」、前掲『蹴鞠の研究』五八・五九ページ。『国会』の「進退作法事」の条に「未練ならん上臆二人まではいかげせん、……」とある。このような内容の一節は『蹴鞠口傳集上』の第二十一条に師(成通)説として掲げられている。

(5) 現存の『革刎要略集』中には見当たらない。なお、『革刎要略集』の翻刻も『蹴鞠の研究』一七一～三三七頁所収。

(6) 『国会』「付鞠於枝事」の条。鞠を鞠場に運ぶのに木の枝に付て運ぶのが後鳥羽院以来の故実であった。御子左流や飛鳥井流では、梅は懸としては用いるが鞠を付けるには用いないとしていた。ところが、宗緒が將軍家鞠会で梅の枝に鞠を付けたので、皆がこれを難じたという。このような事が流派間の相論の材料であった。宗緒の御師範については、『實躬卿記』正安四年二月十三日、『極秘蹴鞠部類記』岩瀬文庫所蔵六一〇〇一～二五二三所収。

(7) 『二老草刎話』上中下、平野神社と天理図書館の所蔵本はこの外題であるが、内閣文庫所蔵本(一九九一・二八六)は『鞠の御

- 會」という外題である。但し『鞠の御會』には、『一老革刎話』の下巻にあたる弘安八年以降の部分がない。
- (8) 『愚管記』六、延文五年三月十五日、『大日本史料第六篇之二十三』六九ページ。
- (9) 『花園天皇宸記』増補史料大成所収、元亨元年六月二十二日、二四八ページ。
- (10) 二条良基「貞治二年御鞠記一名衣かつきの日記」、『群書類従』第十九輯、前掲三七五―三八〇ページ。
- (11) なお、有文燠革の職については、『群書類従』第十九輯所収『遊庭秘抄』『蹴鞠の項参照。
- (12) 『内外三時抄』懸樹事の条にある。前掲『蹴鞠の研究』三四六ページ以下。
- (13) 「鷹を据えて鞭を打つ」の解釈については、村戸弥生「院政期における蹴鞠研究序説―蹴鞠口傳集の謄を起点として」、前掲桑山浩然編『蹴鞠技術変遷の研究』三三―五〇ページ参照。
- (14) 『古今著聞集』卷第十一、蹴鞠第十七「侍従大納言成通卿の鞠は凡夫の業に非ざる事」、『古今著聞集』下、新潮日本古典集成第七六回、新潮社、平成三年、五二―五四ページ。
- (15) 向ッメ図『二条流蹴鞠秘記』所収、後掲注四(10)参照。飛鳥井流の對縮図は『内外三時抄』練習篇二の縮開の条にある(大理図書館善本叢書三一『古道集』二八二ページ)が、図1、2に掲げた御子左流のものと多少違うようである。
- (16) 四
- (17) 『二条家蹴鞠抄』は現在平野神社所蔵、東京大学史料編纂所写真帳冊次五五
- (18) 『太平記』二、日本古典文学大系三、岩波書店、昭和六〇年、一八―二二ページ。
- (19) 井上宗雄「冷泉家の歴史」(一)『しぐれてい』第五号(平成七年一月二十日)によると、民部卿は長家以来御子左家ゆかりの職で、家の正統の後継者が就く習慣であった。為定は建武四年これに任ぜられている。
- (20) 『大日本史料第六編之二十三』六八ページ、『大日本史料第六

- 編之二十六』三五八ページ。
- (21) 井上宗雄『中世歌壇史の研究―南北朝篇―』明治書院、昭和四〇年、五六五ページ。
- (22) 『蹴鞠書』国会図書館所蔵、わー七八三―六。
- (23) 『冷泉家系図』内閣文庫所蔵、二六二―八六、一軸、江戸初期写。この系図には、飛鳥井・難波両家の略系図をも収めており、御子左家一門の人々については、歌鞠宗匠と歌鞠の上手の人を克明に記入している。鞠関係のこと、例えば寛文四年の「蹴鞠家業願出」のような事に用いられたのであろうか。
- (24) 井上宗雄、前掲書六一三ページ。
- (25) 『貞治二年御鞠記』前掲(3)―(10)
- (26) この鞠會記録は『二条流鞠道秘記』天理大学付属天理図書館蔵、七八三―二七五八所載。同書は旧飛鳥井家所蔵の卷子本である。天地約二五センチ、長さ約八七〇センチのかなり大部の巻物である。五十条程の一つ書きの箇条が並ぶが、前半三分の二と残りの部分とは底本が違ふらしい。この後半部分が『国会』系統の遊庭秘抄の写と思われる。
- (27) 次節参照。なお、康永二年の仙洞鞠會の記事は、注三(6)の岩瀬文庫所蔵『極秘蹴鞠部類』にも「不知記」所載として掲げられている。年紀はこちらの史料によった。
- (28) 桑山浩然「蹴鞠書の研究」、前掲『蹴鞠の研究』一四九、一五〇ページ。
- (29) 注四(10)参照
- (30) 『満濟准后日記』永享六年正月十八日『統群書類従補遺一』所収、昭和五十六年、統群書類従完成会、五四五―五五五ページ。
- (31) 井上宗雄「冷泉家の歴史」(八)『しぐれてい』第六号、平成八年十月二十日。
- (32) 『公卿補任』によると、為尹は応永十五年二月、権中納言で任民部卿(兼務)。
- (33) 以上
- (34) (平成八年十一月八日受理)



『二条流鞠道秘記』による

図 1

対縮《国会》巽の木に懸る

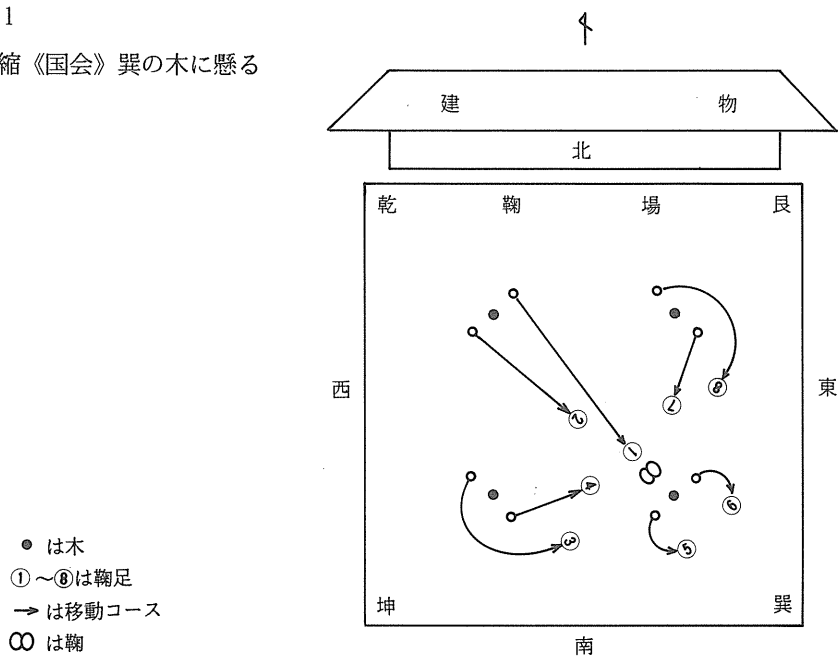
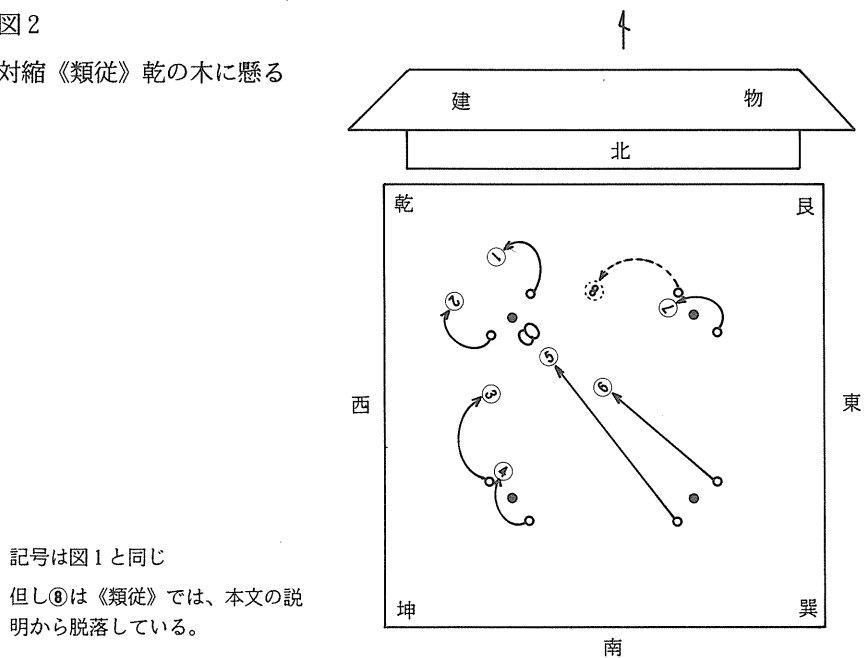


図 2

対縮《類從》乾の木に懸る



## A Study of YUTEIHISHO

Tohru Watanabe

## Abstract

*Yūteihisho* (The Secret Book of Court Play) is a book on *Kemari* or *Shukiku* of the *Kugemari* Mikohidari School, which was compiled in or around the mid-14th century. It describes general features of *Sukiku* such as the playing-field, equipment, costumes, manners, and techniques. The book contains a little less than 20,000 letters, making it relatively short for a book of this sort. However, it is one of the relatively well-known works on *Shukiku* because it was included in the *Gunshoruiju* (The Collective Book Series).

**Purpose of this study:** There are two candidates for the editor of the book, Mikohidari Tamesada (1293~1360) and Tamesada's cousin, Nijo Tameaki (1295~1364). The most prestigious index of Japanese bibliographies, *Kokusho-Sōmokuroku*, includes a note saying "some claim the author is Nijo Tameaki", but formally describes the work as written by Mikohidari Tamesada. This study intends to cast light on the identity of the author through investigation of a series of traditional versions of the book.

**Result:** So far, author has examined fifteen versions of the book, other than those included in the *Gunshoruiju*. Eight of them are listed in *Kokusho Sōmokuroku*. Generally, these versions can be categorized into two groups. One category is a collection of work descended from the one included in the *Gunshoruiju*. Others are variations of an edition in the National Diet Library, referred to as the "Meireki Editions". The former group are considered to be the works of Tamesada. Those of the latter group are thought to be the works of Tameaki or his younger brother, Tametada(1310~73), who may in fact be more likely to have been the true editor. There is no appreciable difference between the contents of the editions in the two groups. Editions from both groups are based on the Mikohidari family's traditional game theory and records on *Shukiku*. These fundamental writings had been extant for as long as a full century since Tameie(1200~75) first founded the school. The only difference between the works of two groups are the specific cases they refer to. The reason for the origin of the two variations might be speculated as having been the result of conflicts that developed in the Mikohidari family in that period.